國學院大學学術情報リポジトリ

〔談話室〕終止形接続の助動詞

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小田, 勝, Oda, Masaru メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000500

終止形接続の助動詞

小田　勝

学校で教わる古典文法には「終止形接続の助動詞」というものがあって、「べし・まじ・めり・なり・らし・らむ」がこれに相当するのだが、これらの助動詞はラ変型活用の語には連体形に接続する。したがって、古典文法の授業では、（A）終止形に接続する助動詞があること、（B）すべての終止形接続の助動詞はラ変型活用の語には連体形に接続すること、が教えられている。Aの「終止形に接続する」という説明には戸惑う高校生がいるかもしれないが、活用形の名称はあくまでも代表的な用法に基づいたものであることを付言すれば（例えば受身の助動詞は「未然形」接続である）、納得するだろう。だから中等教育においてABのように説明することに何の問題もないのだが、この〝事実〟に深遠なる文法論的な意味を読み取って、助動詞が終止形に接続するということについて深遠な理論を展開しようとしたり、Bの〝事実〟からラ変の特殊性を看取しようとしたりするのは、見当違いなのではないかと思う。

そのことは、自力で活用形を作ってみれば判然とするのである。すでに拙著『実例詳解古典文法総覧』（二七頁以下）で示したことだが、ここに再掲してみよう。例えば動詞「流る」が「流れ」の形になるのは「流れず、流れむ、流れけり、流れぬ」のような環境であるが、これを「散る」に変えると「散らず、散らむ、散りけり、散りぬ」のようになる。動詞を変えてこのようなことを繰り返せば、「ず・む・けり・ぬ」が下接する形が常に同一であるとは限らないが、任意の動詞において「ず」が下接する形と「む」が下接する形は常に同一であることが分かる。このようにして、すべての動詞で同じ語形が現れる環境ごとに、動詞の形を整理すると、次のようになる。

①言い切りの形　散る　流る　落つ　見る　死ぬ　く　す　あり
②-ず・-む　散ら　流れ　落ち　見　死な　こ　せ　あら
③-けり・-ぬ　散り　流れ　落ち　見　死に　き　し　あり
④-べし・-らむ　散る　流る　落つ　見る　死ぬ　く　す　ある
⑤-体言　散る　流るる　落つる　見る　死ぬる　くる　する　ある
⑥-ど　散れ　流るれ　落つれ　見れ　死ぬれ　くれ　すれ　あれ
⑦命令の形　散れ　流れよ　落ちよ　見よ　死ね　こ　せよ　あれ

このようにして活用形は、本当は七種類が設定されるのである。周知のように学校文法では活用形を六種類としているが、これは右の①と④とを同一視して一活用形に合併しているのである。たしかに①と④との差は、たかだかラ変の部分に過ぎないけれども、形容詞・形容動詞でも①と④とで異形が現れるのだから、同一視するほどの小異でもないように思う。そして、このようにしてみれば、古典文法でいわゆる「終止形接続の助動詞」なるものは、本当は終止形に接続するのでも、ラ変に限り連体形に接続するのでもなく、右の「第④形」に接続すると理解すべきなのであって、本稿冒頭に示したＡＢは活用形を六種としたことの制約による単なる説明の方便であることが理解されよう。だから、この現象に何か深遠なる文法理論を見出だそうとするのは、見当違いというべきであると思う。

なお終止形接続の助動詞の中で「なり」だけは、上代では「いたくさやぎてありなり［阿理那理］」（古事記）のようにラ変に対しても終止形（右の「第①形」）に接続する。中古になると「さためなとも侍るなるは」（源氏物語・大島本・須磨５ウ）、「うたて侍るなるなかにも」（同８ウ）のようにラ変には連体形（右の「第④形」）に接続するようになるが、「獅子の血に侍りめり」（法華百座聞書抄、一一一〇年）のような例もあり、殆どの例が撥音便形に接続していることもあって、「なり」のラ変への接続にはなおよく分からないところがある。

（古典文法）